

**知的障害で性同一性障害(FtM)当事者のライフストーリーから読み解く
セクシュアル・アイデンティティ形成
人びととの<相互作用>が織りなす<人間模様>から「その人らしい生き方」を考える**

杉崎 敬(立教大学大学院博士後期課程・8006)

知的障害と性同一性障害、相互作用、セクシュアル・アイデンティティ形成

1. 研究目的

本研究は、軽度知的障害で性同一性障害(FtM)当事者のAさん(30代)と、それを取り巻く人びととのインタラクティブな関わりが、Aさんのセクシュアル・アイデンティティ形成にどのような影響を与え得るのか、Aさんの過去から現在に至る「語り」を手掛かりとして、パートナー(40代・交際歴13年・現在Aさん宅で同棲中)、知的障害当事者たち、支援者、そしてセクシュアル・マイノリティ当事者の人びととの<相互作用>を通して明らかにする。

2. 研究の視点および方法

アイデンティティ形成には様々な要素が融合しており、セクシュアリティはその要素の重要な部分である。人は、セクシュアリティを表現する機会を持つことで、結果として自分のアイデンティティを明確にすることができる(Selina Bonnie 2004、田中訳 2010)。セクシュアル・アイデンティティは、セクシュアリティとアイデンティティの遇有的結合であり、性愛の対象選択の性別を媒介にして形成されると共に(伊野 2001)、性的対象の性別に焦点が当てられ、自己の性別は自明のものとされる(伊野 2005)。

本研究は、知的障害で性同一性障害(FtM)当事者のAさんのセクシュアル・アイデンティティ形成と、Aさんを取り巻く人びととの対話的な関わりに着目し、その<相互作用>が織りなす<人間模様>を重要なパースペクティブとして位置付ける。

最近、複数の生きづらさを抱えている当事者を「ダブル・マイノリティ」「複合マイノリティ」と言うが、こうした立場の当事者たちは、周囲からの差別・偏見により、通常の世界を送ることに大きな困難さを抱えている。本報告は、今まで社会的にもなかなか可視化されずにいたこうした当事者たちの<リアリティ>に迫ることにより、そうした当事者たちの「その人らしい生き方」とは何かを考える契機になればと考える次第である。

研究方法としては、質的項目にそって自由に語り頂く半構造化インタビュー調査を実施し、考察するにあたっては、ライフストーリー法を用いた。調査期間は、2011年3月~6月で、Aさんとパートナーの方の都合にあわせて調査日を調整した。聞き取りの内容は、Aさんの了承を得て録音し、トランスクリプトを作成。またAさんの希望により、パートナーの方との同席の上、聞き取り(計5回、2時間~2時間半)を実施した。

3. 倫理的配慮

本研究で取り上げるAさんやそのパートナーの方には、研究倫理に対する配慮という観点から、トランスクリプトの中の個人名・団体名等は全て匿名とし、Aさんを特定されないよう最大限の配慮をした。また、本報告に際してはAさんの了承を得た。

4. 研究結果

Aさんのセクシュアル・アイデンティティの表出は、カミングアウト(自分についての何らかの真実を他人に開示する行為)にある。カミングアウトには重要な四つの過程があり、個人的・私的・公的・政治的なレベルに分けられるが、そのつながりは固定的ではなく、特定の順序があるわけでもない(Plummer 1995、桜井ほか訳 1998)。Aさんの場合、知的障害当事者の本人活動の場における男性当事者(ヘテロセクシュアル)からの告白を契機に、本人活動に関わっている当事者及び支援者に対して私的にカミングアウトすることを決意する。その後行われた本人活動のコンサートでは、自身の性同一性障害というセクシュアリティを公的にカミングアウトすることになる。しかし、なぜAさんは私的なカミングアウトから公的なものへと至ったのであろうか。そこには、Aさんのカミングアウト・ストーリーとして語り出された「知的障害でいて性同一性障害」という言わば複合的な被差別

経験を、周囲の人びとに語ることによって、それらの人から返ってくる言葉<応答>を期待している姿が見て取れるからではなかろうか。被差別の経験を語ることは、これまで沈黙を強制してきた支配的文化に対する抵抗であり、語りを聞き取ることは、その抵抗に対する応答(リスパンス)である(山田 2005)。Aさんは、「知的障害でいて性同一性障害」であることから今まで様々な「生きづらさ」や「語りづらさ」を経験してきた。またAさんは、「知的障害で性同一性障害」という被差別経験を語り出すこと(カミングアウト)自体が、ある種の社会に対するAさんなりの<抵抗>であり、周囲の人びとがその語りを聞き取る行為が、Aさんのそうした<抵抗>に対する<応答>であると共に、Aさんの語りに対する<共感>であるとも言えるのである。事実、「障害がある人(知的障害)の中にも性同一性障害の人もいることをもっと知ってもらいたい」とするAさんの語りは、そうした社会に対する<抵抗>であると同時に<アクション>でもあり、被差別経験に抗うための<術>なのであろう。そして、カミングアウトを決意させたのは、同じ知的障害当事者たちの「Aさんは男なんだね」という言葉、パートナーの女性の「手術(性別適合手術)なんかしなくても、そのままの方がいいから」という言葉、元養護学校教員が「Aくん」と呼んでくれた言葉、そうした何気ない言葉が、Aさんのカミングアウトに対する<応答><共感>となって、Aさんを私的なカミングアウトから公的なカミングアウトへと向かわせしめた。

Aさんは、カミングアウトを機に本人活動に関わる知的障害当事者たちの「接し方」が変わり、今まで話してこなかった当事者とも交流がもてるようになったと語る。支援者は「こうした人を偏見の目で見るとはではなく、お互いを尊重できるようになった」という意識の変化も芽生えた。一方で、セクシュアル・マイノリティ当事者(おなべ・レズビアンなど)のオフ会への参加や、過去に「おなべバー」で働いた経験などから、性別適合手術やホルモン療法の経験者との交流をもち、こうした場合は、Aさん自身のアイデンティファイの場ともなった。パートナーの女性は、Aさんの母親(4年前に他界)の面倒を見ながらAさんと交際を続けてきた。「私が一生懸命、(Aさんの)お母さんの洗濯をしたり、介護みたいな感じのことまでしている。普通他人のパンツを洗うなんてしない、他人には出来ない。食事も作った」と、Aさんとの親密性を強調した語りをする。こうしたパートナーの女性との親密な関わりは、パートナーの女性が望むセクシュアリティのあり方が、Aさん自身のセクシュアリティに多少なりとも影響を与えているであろう可能性は高い。

このように、Aさんの周辺にいる人びとの言葉(<応答><共感>)に支えられながら、そして、そうした言葉に裏付けられながらのカミングアウト(<抵抗>)は、カミングアウトというメソッドを通して「語る」という行為から得た人びとの言葉(<応答><共感>)を得ながら、自身のセクシュアル・アイデンティティを<構築>しようとしている姿に他ならない。この「語る - 語られる」という<相互作用>から紡ぎだされたAさんのセクシュアル・アイデンティティは、また「語る」(カミングアウトする)という行為によって、再び自らのセクシュアル・アイデンティティを<再構築>あるいは<強化>しているのではないかと考えられる。「今後もカミングアウトを続けたい」とするAさんの強い想いは、周囲の<応答><共感>を得られる環境によってもたらされ、「その人らしい生き方」の<可能性>の<枠>を広げたのである。

参考文献

- 伊野真一「構築されるセクシュアリティ クィア理論と構築主義」上野千鶴子編『構築主義とは何か』(勁草書房・2001)
- 「脱アイデンティティの政治」上野千鶴子編『脱アイデンティティ』(勁草書房・2005)
- Plummer, Ken(1995) Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds, Routledge =1998、桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳『セクシュアル・ストーリーの時代 語りのポリティクス』新曜社
- Selina Bonnie 19(障害者・障害・セクシュアリティ), John Swain, Sally French, Colin Barnes & Carol Thomas(2004) Disabling Barriers: Enabling Environments, 2nd Edition, London: Sage (竹前栄治/監訳、田中香織/訳『イギリス障害学の理論と経験』明石書店、2010)
- 山田富秋編著『ライフストーリーの社会学』(北樹出版・2005)